

授賞理由

日本ロシア文学会大賞も今回で 5 回目を迎える。これまで本賞は、学会以外でも広く知られた名高い研究者を顕彰すると同時に、専門家以外にはあまり知られていないが、その業績がもっと注目されてよい方々も選考の対象にしてきた。今回授賞が決まった澤田和彦・埼玉大学名誉教授は、その地道な研究が国際的にも高く評価されているにもかかわらず、日本の学会では真価が十分理解されていないという意味で、まさしく授賞にふさわしい方だと委員会は判断した。

澤田氏の研究は多岐にわたっているが、中心的なものは次の 2 つである。

1) 19 世紀ロシア作家ゴンチャロフの研究：澤田氏はとりわけ『フリゲート艦パルラダ号』の時代考証、本文校訂で多大の貢献を行い、現在刊行中のアカデミー版ゴンチャロフ全集の編集者にも加わっておられる。さらに、2017 年には国際ゴンチャロフ学会において国際文学賞（研究者部門）を受賞されているが、これらは澤田氏のゴンチャロフ研究が世界的な評価を受けていることの証左であろう。

2) 日露交流史：澤田氏は主著『白系ロシア人と日本文化』（成文社、2007 年）において、ロシア革命後日本に亡命してきた白系ロシア人が日本文化・社会にもたらした影響を実証的に、ミクロなレベルから検証されているが、とりわけ第 10 章、第 11 章の書誌は、日本の日露交流史研究の今後の発展の礎を築いたもので、欧文でも発表され、世界的にも高い評価を受けている。なおこの著によって澤田氏は、早稲田大学から博士号を取得されている。またこの続編とも言える『日露交流都市物語』（成文社、2014）は、日露 12 の都市を舞台に日露文化交流の実態を実証的・総合的に論じて、当時の人々の生活を浮き彫りにしている好著である。

このほかポーランドの民族学者ブロニスワフ・ピウスツキの研究、来日ロシア人の研究など澤田氏の研究は幅広いが、さらにいくつかの学会、大学で後進の育成に当たって来られたことも忘れられない。

このように澤田氏の研究は、日本国内にとどまることなく国外でも高く評価されており、極東やチェコの研究機関、図書館などを訪れると澤田氏の名前がいかに広く知られているかが実感できる。

以上の理由から日本ロシア文学会大賞選考委員会は、2018 年度の日本ロシア文学大賞候補者として澤田和彦・埼玉大学名誉教授を推薦することを決議した。

日本ロシア文学会大賞選考委員長 諫早勇一